



更井良夫

岡山博愛会
理事長兼会長

・美子

ご夫妻に聞く

母校同志社と岡山

聞き手

河野 仁 昭

堀貞一牧師のこと

岡山というところは、同志社と古くから非常に深い関係があるところですね、新島

懂れたわけです。
——お父さんにご理解があったわけですね。

裏の玉島航海（文久二年）以来縁があるとい

更井 父は岡山教会の教会員だったから。私の兄弟はみなクリスチャンだった、姉も。

つていいくらいで……。そのわりに歴史的な関係の研究が余りなされていない気がする、ということもございまして今日は寄せていただいたわけですが、更井先生は岡山のお生まれです。

ね。
——じゃあ、クリスチャン・ホームですね。
更井 母だけが洗礼を受けていなかったけれども。

更井 はい、今は岡山市に編入されていますが、吉備郡高松、豊臣秀吉の水攻めで有名な高松城のむこうで生まれました（明治四十年四月十二日生まれ）。

——昭和二年に大学予科へ入学なさって、八年に文学部神学科ご卒業ですね。堀牧師はどういう方だったんですか。

——珍しい姓ですが、そちらの方にはたくさんおられますか。

更井 くせのある方ではあったけれども、人徳とでもいうべきものがありました。特に新島先生のお話をされると、学生が全部インスパイアされたですよ。今は聞く学生も変わってしまったっていうけど、先生にもああいうお話ができる方はいないでしょう。

更井 たくさんはいないが、少しばかりはいます。

——新島の遺髪を試験管に入れて持ち歩いておられた、という話をききました。

——中学まで岡山で学ばれたようですが、それから同志社大学の神学部へ進学なさったのは、同志社出身の方にも勧められて？

更井 遺髪ではなくて、自責の杖のかげらです。それを見せながら新島先生の話をされるのです。

更井 堀貞一先生が昭和のはじめに同志社でリバイバルをおこしたでしょう。

——はい、ハワイから帰ってこられて。

更井 同志社は非常に信仰的だというので

——どんなお話でしたか。



更井良夫氏

更井 今はいまこまかい内容までは憶えて

いませんが、いま中学校が使っているチャペルで、金曜日の晩と日曜日の朝の礼拝に堀先生が話をされるときは、ほとんどいつぱいになりました。

同志社の中だけでなく、伝道で全国の組合教会を回られてましてね、だから全国的にリバイバルがおきた。私はその感化影響で大正十四年四月に、岡山教会で原忠雄牧師から洗礼を受けたんです。

昭和初年の同志社

——先生が予科へ入られて次の年に、有終館が火事になって大騒動になるでしょう。

更井 そのことは『同志社時報』（八十四号）（有終館失火事件の思い出）にも書いて

おいたけど、大した火事じゃなかった。

——そうですね、北風にあおられて火の粉が御所へ飛んだなどという話もあるし、有終館の三階には焼けぼくいのような梁がいます残っていますけど。

更井 三階の焼け跡のことは知りませんが、火の粉が御所へ飛んだなんて、そんなことはありえない。

私はそのころ西寮にいましたが、寮のおばさんが「火事や、火事やー」いうので、「どこや」ときいたら「有終館や」いうもんだから駆け付けた。そしたら、夜だから（昭和三年十一月二十三日午前二時ごろ出火、四時鎮火）はつきりしたことはわからないけど、煙ぐらい出ていたかもしれないが、焰も見えなかった。

——先生が行かれたときは、もう消えかけていたんじゃないですか。（笑）

更井 そんなことはない、大騒ぎするほどの火事じゃなかった。ただ、地下室が軍事教練で使う銃の倉庫になっていたので、やはり西寮の東館にいたラグビー部の連中が、「天皇陛下の銃だから焼いちゃいかん」といって運び出しました。焼いたら当時としては大変

なことだから。

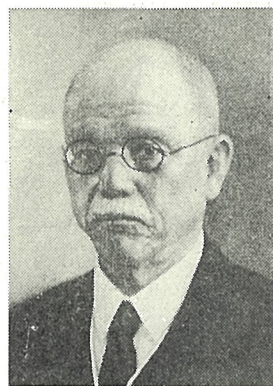
そういうことはあったけど、有終館の近辺には寮生たちがうろろしている程度で、予科の先生たちの姿（有終館は予科の教室だった）だって見えなかった。だから私が、お知らせしなきゃと思って、当時予科長だった速水藤助先生のお宅（寺町通鞍馬口下ル）まで知らせに走ったんです。

——出火場所はどこですか。石段を上ったところ？

更井 石段を上って一階の右の隅に教授室があった。そこに置いてあった一メートル四方ぐらいの木の火鉢が火元です。木の枠の内側にトタンが張ってあって、その中へ灰を入れ、そして木炭をどっさり並べて火がおこしてあった。その過熱で火鉢の底がこげて、床が燃えだしたんです。

——昭和のご大典の儀式が御所であって、その間、同志社でも教職員が当番で校内の夜警にあたっていた。その当番の人が暖をとるための火鉢だったようですが、当時は教室でもそんな火鉢だったんですか。

更井 教室はダルマストヴで、毎日、石炭がバケツ一杯だけ配給になった。



堀真一牧師

——一杯だけ？ 真冬でも？

更井 そう。それを朝のうちに使っても午後使ってもよかった。でも石炭ですよ、教室だけなんであんなけなことをしていたんだらう。

——大した火事でなかったにしては、海老名弾正総長以下、全理事・役員が総辞職した。

更井 いま考えたら笑い話みたいだけど、学生と先生方が全員、頭を丸坊主にして、御所の表門の前へ行って、お詫びの最敬礼をした。(笑)

——中学生も？

更井 有終館だから、中学は関係がない。

——責任をとって辞めた理事は復帰というか再選されますけど、海老名総長はそのまま

辞めてしまわれたでしょう。火災のときには中国地方どこかへ出掛けておられて、留守だったはずですね。

更井 広島教会の伝道集会に出ていた。そして広島で倒れられて、別府のどなたかの別荘で養生されていた。海老名先生が総長をこれ以上上つとめられるのは健康上無理だ、というような話が理事の間にありまして、私たち学生大会を開きましてね、西村金三郎理事などが海老名総長を追放しようとしているんだ、健康かそうでないか総長を見て、連れて帰るべきだということになった。

それで私ともう一人、法学部経済学科の執行種治君と二人が学生大会で代表に選ばれて、海老名先生の様子を見に行った。

——どうだったんですか、海老名総長。

更井 お元気でした。「こんなに元気だ」とおっしゃって、手を振り上げたり、立つてみたりなさって。(笑)

帰りに汽車で京都駅へ着いたら、中立売警察署の刑事が尾行するんだ。

——どうして？

更井 学生大会で選ばれて、海老名先生を迎えに行ったからですよ。

——学生たちを煽動しているリーダーだと見られたんでしょうか。

更井 そうでしょうな。同志社へ帰ったら堀真一先生が心配しておられて、「どうして迎えになど行ったか」と叱られました。「西郷を殺したのは薩摩の若者たちじゃないか、海老名先生を殺すのは君たちだぞ」というてね。そのときはもう、海老名追放について堀先生は知ってなすったんです。

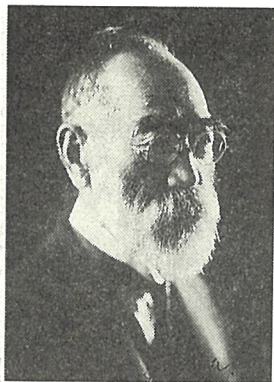
——岩倉土地の買収問題(昭和二年)あたりから、教員の間でも意見の対立があらわになりつつあったようですね。

更井 私は予科の学生でしたから、余り詳しいことは知りません。ただ、野村(重臣)先生など、中島(重)先生は左翼だと批判したり、賀川(豊彦)先生が講演に來られることに對して反対したり、そういうことはありました。

どうも、余りいいことが記憶に残っていないので申しわけない。(笑)

大工原銀太郎総長とアームストロング

——海老名総長が去られて一年ばかりのちに、九州大学の総長だった大工原先生が、総



海老名正純先生

長として迎えられますね（昭和四年十一月）。
更井先生は大工原総長時代に神学科に学ばれるわけですが。

更井 そうです。

——どういふ方ですか、大工原という方は。

更井 大工原先生は日曜日ごとに同志社教会へ来なすった。だから私たち、先生といっしょに歩いたり、先生を囲んでいろいろお話しする機会がありました。

——プライベートな話で恐縮ですが、私が大学を卒業しますとき兄が来てくれましたね。

——お兄さんは同志社ではなくて。

更井 東京大学の経済学部卒業です。たしか住谷悦治先生と同期のはずです。東大には当時、卒業式がなかった。卒業証書は郵便で

送ってくるんだ、それには「岡山県平民 更井正人」と書いてある、百姓の子だから。（笑）

——さすがは東大、というべきか。（笑）

更井 とにかく兄が来てくれて、私はそのころアーモスト館（昭和七年五月竣工）にいたものだから、そこから卒業式がおこなわれる栄光館のファウラー講堂（昭和七年二月竣工）へ行きかけたら、大工原先生が式に臨むために東門から出てこられた。それで先生としゃべりながら講堂まで歩いて行ったんですよ。そしたら兄がびっくりしましてね、「お前、同志社ちゅうところはえらいとこやのう、総長と学生がいっしょに歩いて話ができるんか」いうんですよ。東大では総長と話するどころか、顔を見たこともなかったそうです。

——同志社と東大のちがいでしょうけど、大工原先生も九州帝大の総長でしたのね。

更井 教会でもいっしょだったし、アーモスト館の行事にも来られたし、よくお茶を飲みにといふか、遊びにもおいでになりました。

——格式ばらない方だったようですね。

更井 クリスマスのとき、私たちはプレゼントを差し上げようということで、いろいろ

考えて家庭園芸用の道具をプレゼントした。農学博士だからというので。

——なるほど。

更井 デントン先生にもプレゼントしたですよ。あの人は「ダーリング同志社」なんてよく言っていたから、「ダーリング」のリングがいいというので、同志社のマークがついた銀の指輪を差し上げました。彼女は指輪を持っていなかったですからね。その指輪が入った箱を紙で何重にも包んで、すぐには開けられんようにして。（笑）

なにしろ当時の学生たちが考えたり、いたずらすることなんて、子供っぽいかわいなことですよ。教授の家の表札をとってきてマントルピースで燃やしてみたり、相国寺の池から鯉を釣ってきて、それを浴槽の中で飼って岡部のおばさんを泣かせた。

——むちゃですね。

更井 そう、本当にむちゃ。とって来た鯉をどこかで料理してもらって食っちゃった奴だっていたもの。

——岡部さんというのは管理人さんでしょう。

更井 そうです、ご夫婦でね。厳重に美し



大工原銀太郎 総長

く管理していましたから、私たちも汚さないように注意しました。ご主人は海軍の軍人で特務少尉かなにかだった。私たちはご主人が召集されて舞鶴かどこかへ行かれるまで、海軍の将校だなんて知らなかった。

——先生はアーモスト館の第一期生でしょう。入寮資格がむずかしかったんじゃないやありませんか、クリスチャンであることとか、英語がよく出来ることとか……。

更井 いや、そんな規程はなかったように思うけど、管理委員会のようなものがありまして、選考しました。私はアーモスト大学代表のE・S・カープ先生（神学科教授）が入れと言われるものだから、別段入りたいとは思っていなかったんだが入寮しました。試験もなにもなかった。当時、神学科の学生では

賀集一君がいた。彼は神学科の中に社会事業学専攻というのができて（昭和六年）、その専攻に籍をおいていました。のちに社会福祉の教授になる嶋田啓一郎君が第一期生です。

——先生がアーモスト館におられたころ、アーモスト大学の学生代表は誰だったんですか。最初がスチュアート・ニコルズで、アーモスト館は彼の記念だといえますね。

更井 J・M・トロッターというのがいましたが、彼は途中で神経衰弱になってお母さんが迎えにきて帰国しました。次に来たのはD・L・ゾールだった。

——ゾールは確か二度目ですね。そういう代表を囲んで、寮生たちが学習活動をするとか行事をやるといったことがあったんですか。

更井 特別になにかやるということとはなかったですよ。毎週何曜日だったか、集まってお茶を飲むといったことはしたけれども。

——寮生活は厳しかったんでしょう。

更井 それもまあ、さっき言ったように子供っぽいいたずらをして岡部さんを困らせる連中もいたし……。しかし私は比較的きちんとしてやりました。禁酒禁煙も実行したし。今も

禁酒禁煙で、私が自慢できることというたら、そのことくらいなものだ。（笑）

同志社での教会活動

——先生は岡山教会で洗礼を受けたときさきうかがいましたが、同志社へ入学されてからも籍は岡山教会に？

更井 私に洗礼を授けて下さった原忠雄牧師、この方は原忠美の長男で……。

——忠美は新島先生が亡くなられるとき新潟にいて、のちに明石で牧師をされた。若くして亡くなられますね。

更井 そうそう。忠美の夫人のともさんは、同志社女子部の常盤寮の寮母さんをされていたし、原忠雄牧師も当時、同志社教会だったから、私が入学したら同志社教会へいといわれて……。ある人は私に忠告しましたよ、「君、将来、教会の仕事をするつもりなら、同志社教会については駄目だぞ」とね。

——学校教会だし、学生生徒ばかり相手にすることになるからでしょうかね。

更井 でも私は原牧師から離れる気持ちはなかったんで、学生時代はずっと同志社教会でお世話になりました。原牧師が日曜学校の



同志社教会日曜学校（1930年6月1日花の日礼拝—クラーク記念館前）

校長だったから、そのお手伝いをしましてね。京都市内の教会へは行きませんでした。

原牧師が台北教会へ移られてからは速水（藤助）先生にかわって、速水先生のもとで日曜学校の実務を私ずっとやりました。先生は日曜学校にも余り来られないもんだから、花の日やクリスマスなどのときには私が校長の役目をして。

——じゃあずいぶん忙しかったですね。その頃の日曜学校には、何人ぐらい出席者があったんですか。

更井 二〇〇人以上きましたよ。
——そりゃすごい。

更井 なかなか盛況でした。それから、賀川豊彦先生が「神の国」運動と称する全日本を神に捧げようという大運動をおこし、『神の国新聞』というのを発行しておった。

——そのような新聞があったということは聞いています。

更井 その新聞をみんなに買ってもらうわけだ。女子部へも届けに行きましたよ、女專の英文科と家政科に役員が一人ずついたのでその人たちの所へ。『神の国新聞』を売った手数料で、私は「日曜学校の旗」をこしらえ

たですよ。先日のことだけど、私の博愛教会から同志社大学の神学部へ入って、いま大学院にいる学生が、その旗を女子部の倉庫で見つけてきてましてね、「先生これでしょう」といって、見せに持って帰ってくれた。

——よく残っていましたねえ。

更井 ほんとうによく残っていた。日曜学校の書類なんか、どこへいってしまったかわからなくなっちゃったのに……。その旗は私たちがデザインを考えて、西陣の織物屋に頼んでこしらえたんです。「同志社教会日曜学校校旗」と書いてね（表題のカット）、箱の蓋に速水先生の署名があるんだ。

——いま先生とこにありますか。

更井 いや、私のものじゃないからすぐお返しした。同志社教会の佐伯（幸雄）牧師にたずねたらわかるでしょう。

——フアウラ・チャペルが出来てからは、日曜学校も栄光館の方で……。

更井 いや、ちがう。私たちのときは、いま中学がつかっているチャペルが同志社教会の会堂だった。それ以外のところを使ったことはなかった。日曜学校は神学館（現・クラーク記念館）でした。



更井美子夫人

デントン先生のこと

——さっきデントン先生にプレゼントしたというお話がありました、デントン先生のことについてなにか……。

更井 それはこの人（美子夫人）のほうが詳しい。私などはアーモスト館へお招きしたときぐらいしか接していないから。デントンさんはアーモスト館へ来ましても、大工原総長だつて寮に備えてつてある木綿の靴カバーをつけて上られるのに、あの方はつけない。

——つけないで、土足で？

更井 そうじゃない、玄関で靴を脱いで、スリッパもはかずに靴下のまま上ってくるんだ。

——どうして？ 汚しちゃいかんから？

更井 どうしてだか、なにしろ奇行の多い方だから。

——奥さんも岡山のご出身ですか。

美子夫人 私は滋賀県石山寺の近くなんです。関東大震災の年に同志社女学校へ入りまして、昭和四年に高等女学部卒業、七年に文学の英文科を卒業しました。当時、京大で天文学の教授をしていた山本一清というのが私の母の兄でございまして、その山本が同志社から、それで同志社へ入りまして。

——寮務係なんかもなさったとか。

夫人 はい、卒業してから、常盤寮の、デントン先生と懇意になられるのは、寮務係のころですか。

夫人 それは学生時分からでございました。山本が先生と親しかったのですから、「姪が入学したのでよろしく頼む」というようなことだったんでしょう、きっと。それから私、寮にいましてもデントン先生からお呼び出しがかかるんです。だから先生のお家へ行くことが多いです。

——お家のお手伝をしに？

夫人 ベッド・ルームとか食堂などのお掃

除もございましたが、外国からお客さんが来られると、私を呼びまして「京都の名所をご案内しなさい」といわれたり……。

——英文科だから英語がお得意になるの

夫人 いいえ、ろくにガイドなんてできないんです。市内をご案内してデントン・ハウスへお連れして帰りますと、先生はそこをお客さんに「彼女がサービスしたんだから、サービス料を同志社へ寄附してお帰り下さい」

——なんと、まア。（笑）

夫人 外国の方を、ホテルなどに泊まらなくともデントン・ハウスへお泊めするでしょ。そして翌朝になると、「宿泊料を同志社へ寄附しなさい」（笑）

——徹底していたんですね。でも、ご自身の収入にはなさらないだから、相手も理解してくれただしょうけれども。奥さんまたたび呼び出されて、大変だったでしょう。

夫人 「午後は授業がありますから」と申し上げても、許していただけない。

——入づかいが荒いというか、きびしいですね。授業にも出してもらえないなんて。



M. F. デントン先生

夫人 とにかく「ノー」とは言えないんです、先生の命令は絶対でした。私の印象では、相手が誰であれ、ご自分の意思をとおされる頑固なおばあちゃんでした。

更井 家内と結婚してご挨拶にデントン先生のところへうかがったら、「あなた、私の娘、盗みました！」(笑)。それを変な日本語で、大きな声で私にいうんですよ。(笑)
——奥さんは娘だと思われていたんだ。

(笑)
夫人 高等女学部の四年とか五年のころですと遊びたいさかりですし、先生の命令に従わないこともございました。そんなとき先生は、私をデントン・ハウスのロビーへ閉じ込めまして、三時間でも四時間でも放っておかれるんです。退屈だし居眠りしたくなるしど

うしようもなくなくなったところ、キャンデーを籠にいっぱい入れて持ってきて、「ご苦労さん、もう帰ってよろしい」(笑)。私、お土産いただいて帰ったんです。おもしろい先生でしたよ。

片桐哲先生のこと

——話題の多い方ですねえ、デントンという方。で、ご結婚は？

夫人 昭和十年の五月にこちら(岡山)へ参りました。

——更井先生は大学を卒業(昭和八年)なさって、そのまま岡山博愛会に？

更井 いや、約束があったものだから、翌年の十月末まで上海の中日教会という存留日本人の教会につとめ、九年の十一月に岡山へ帰りました。

——失礼ですが恋愛結婚ですか。

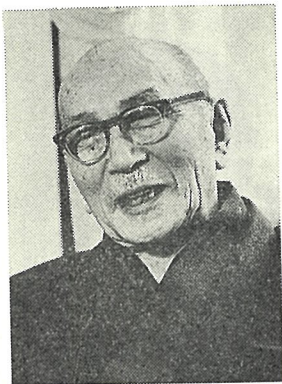
更井 片桐哲先生ご夫妻が仲人をして下さいますね。片桐先生にはいろいろご恩があるんですよ。私の大学在学中に、片桐先生のご指導でバイブル・クラスがありました、が、六年続きました。水曜日の午後にその勉強会がありましたので、「水午会」と名づけまし

てね。青森にいる樋口喜四郎君とか、同志社大学の教授をしていて亡くなった今谷逸之助君、倉敷レイヨンで働いた松山三郎君など、みなその「水午会」の仲間でした。十人いましたが、卒業後もずっと交際がありました。

夫人 私たちは女専で、片桐先生から旧約文学を先生の無料奉仕で教わりました。木曜日がその勉強会の日でしたから「木曜会」と申しましてね。

——じゃあお二人とも片桐先生をよくご存知だったんですね。

更井 ご存知というか、とてもお世話になりました、何かにつけて。これは戦後のことです、片桐先生から私に、同志社の女専に人が足りないの、「京都へきて教員をやってくれんか」というお話があったんですが、私は当時、戦災にあった博愛会の復興で大変なときだったし、ミス・アダムズとの約束もあって岡山を離れるわけにいかなかった。それで、片桐先生が梅花学園の園長兼女子大学長になられましたときは、ご恩返しとそのときの罪ほろぼしに常務理事をひきうけまして(昭和三十三年四月〜四十五年十二月)、月に二日か三日岡山から通ったですよ。



片桐哲先生

——大阪まで？

更井 はい。新幹線なんてまだない時代でしたが、片桐先生には子供の名付け親にまでなっていたくなどで、ほんとうにお世話になっておりましたから。

夫人 博愛会の復興だって、片桐先生の幹事で女専の卒業生が援助にきて下さいましたしね。片桐先生はじめ私の女学校時代の先生方、外国人宣教師の先生方はよくご自宅へ私たちを招待して下さいましてね、いろいろご馳走していただいたり、お話をうかがったり、本当に親切にしてくださいました。ですから教室で受けた感化より、そうした教室外での感化のほうが大きゅうございました。

更井 同志社の人は、人間的には暖かかったなア。

夫人 ほんとにそうでした。

岡山博愛会について

——先ほど来お話ができています博愛会は、現在も更井先生が理事長兼会長でいらっしやるわけですが、創立はいつですか。

更井 明治二十四年です。アメリカン・ボードのミス・アダムズ(Alice Petee Adams)が、岡山最大のスラムであった花畑の実情をみかねて始めたもので、だからアメリカン・ボードの仕事だったといっているんです。アダムズという女性には一言もいって来ましたが、アメリカの大統領を二人も出した(二代目J・アダムズ、六代目クインシー・アダムズ)ような家柄の人です。その人が結婚もしないで、昭和十一年九月まで四十五年間スラムで奉仕されたんだから、私は彼女の感化を受けましてね、せめて彼女が奉仕された年数は働かなきゃいかんと思ってやって来しました。

——奥さんもお手伝いなさって。

更井 そうです、保育園とか。

——アダムズが仕事を始めたころというのは、現在ではちょっと想像できませんね。

更井 なにしるポテトとかミルクとか、そういった外国人の食料になるものなんて何ひとつなかったんだから、みんな神戸から取り寄せていた。そうして不自由に耐えてやって下さったわけだから……。

——アダムズは七十歳の定年を迎えて帰国されたようですが(一九三七年五月九日、マサチューセッツ州ニュートンのナースィング・ホームで永眠)、岡山で燃焼し尽したという感じですね、帰国して一年足らずで亡くなっている。その博愛会は空襲で全焼したようですが、再建が大変だったでしょう。

更井 さっき家内が申しましたように、片桐先生のお世話で同志社女専の卒業生が手伝って下さったり、オーテス・ケリー教授のお父さんであるフランク・ケリーさんとかアメリカン・ボードの宣教師からご援助いただきましたりでね。とにかくつぶしちゃう申しわけないから。

——現在はどうなっているんですか。

更井 職員が二四五人、年間予算十四億円で、病院が二カ所(本院と分院で二五〇ベッド)、特別養護老人ホームのアダムズ・ホーム(一二二名)、保育園(九〇名)、博愛教会



A. P. アダムズ (1936年5月19日)

などをもっています。
— すごいですね。いまや岡山にとってはなくてはならない施設でしょう。

岡山と同志社

— 最初のお話にかえりますけど、岡山と同志社はすいぶん密接なかわりがあったわけですが、最初にJ・C・ペリー、オーテス・ケーリ、J・H・ペティなどの宣教師家族とウィルソンなどが明治十二年に神戸から岡山へ来るでしょう。当時あれだけ外国人宣教師が行ったというのは、ちよつと思議な気がします。

更井 当時、岡山に中川(横太郎)という進歩的な人物がいて、宣教師であったW・テラーといった人を招いたのが始まりです。

アメリカン・ボードとしてはミッションの中国・四国のステーションをここにつくろうというわけで、宣教師を送り込んできたわけですが。そのいきさつは、このペリーの伝記『Pioneer Doctor in old Japan』という本にも書かれていて、家内が翻訳して、岡山県庁の機関誌『おかやま』に一年間、十二回に分けて連載したことがある。

夫人 岡山に関係した部分だけですけれども……。最近また山陽放送から「モーニングサービス」で放送するようにとって下さって、二回ほど放送しましたけれど、岡山の草分けの、その草分けの時代なんです、それは。

— ご夫婦そろって多方面にご活躍なさっておられるんですね。明治十二年という、金森通倫がやってくる。

更井 その金森が岡山教会(明治十二年十月十三日設立)の初代牧師です。それ以後、岡山全域にわたって伝道活動がおこなわれるようになって、私はいろいろ資料を収集していますが、組合教会は県下に二十四ありました。みな岡山教会から分れたものです。

— 日本一かもしれませぬ。

更井 そうです。だから組合教会の総会だって、岡山で二度も三度も開いています。

— 同志社へ岡山から進学する人が多かったのは、多分にそのことと関係がありますね。

夫人 新島先生をたすけて同志社をおつくりになったJ・D・デイヴィス先生のお嬢さん(ゼネビー)は、チャールズ・B・オールズさんと結婚されますが、オールズさんは岡山駐在の宣教師をなさっていて(北部教会とかけもちであり、同志社理事、神戸女学院理事長にも就任)私たちはその宣教師館で結婚式をあげたんです。

更井 オールズ夫人のことは『同志社時報』(第七十一号「オールズ夫人の思い出」)に書かせてもらいましたが、この人は早くから産児制限をとなえていましたね。教会や学校をまわって講演をしていた。私がまだ学生だったころ、オールズ夫人から同志社で講演したいから世話をするように言ってきた。それで堀貞一先生に相談したら「いいじゃないか、旅費も出そう」というわけですよ。ところがデントン先生が反対なんだ。

— どうして?

更井 「同志社では、産児制限教育なんて
いらない」というんだ。だから私、オールズ
さんにそう言ってやった。そしたら「私が同
志社へ行ってミス・デントンに話をする」と
いって岡山から出てきましてね、「これから
デントンのところへ行くから、お前もついて行
こい」というので、仕方ないからついて行っ
た。そしたら二人が大喧嘩だ、すごいねえ、
宣教師の喧嘩というものは(笑)。なにしろ
二人とも早口でまくしたてるんだから、私に
はその内容は十分理解できやしなかったけ
ど、「私の父がつくった同志社で、娘の私が
話をしてなぜ悪いか」「同志社ではセックス・
エデュケーションの話など必要ない」、ま
アそういうやりとりだ。オールズさん興奮し
て泣き出すしね。

——講演はなさったんですか。

更井 やりました、クラーク記念館の二階
で。女子生徒は一人も来なかったし、堀先生
は一銭も出してくれなかった。(笑)

——ミス・オールズは岡山で亡くなられ
たようですね。

更井 そう、脳溢血で、昭和十四年四月二
十一日だった。私、オールズ夫人の弟のジェ

ローム・デイヴィスがイェール大学の教授を
していたので、オールズ氏に頼まれて死亡電
報をうちに行つた。そして帰ってきたらオー
ルズ氏が「もう一度行ってくれ」というん
だ。「死んだとだけだ」と、日本人に殺
されたと思われるかもしれないから、脳溢血で
死んだと打ち直してくれ」とね。それほど日
米の関係が悪化していたんです。アメリカ人
は警察と憲兵に睨まれていたわけだ。

——ミス・オールズのお墓は岡山に？
更井 いや、若王子の新島先生の墓の裏手
が一段高くなっているでしょう、そこにあり
ます。

——大西祝、安部磯雄、山室軍平など、同
志社ゆかりの人たちや、石井十次の孤児院の
ことなど、お聞きたいことがいっぱいある
んですが、またの機会によろしく願いま
す。それにしても更井先生はミス・アダムズ
とのお約束を立派に果たされたじやありませ
んか。つくづくそう思います。

更井 それも同志社の方やアメリカン・ボ
ードのおかげです。石井十次の孤児院だつて
アメリカン・ボードの援助があったからこそ
やれたんですよ。

夫人 同志社あつての私たち夫婦だし、博
愛会だと心から思っています。

——長時間いろんな興味ぶかいお話を、あ
りがとうございました。今後ともどうかお二
人ともお元気で働き下さいますように。
(一九八八年十二月二十二日、更井氏宅で収録)